

ぼっちな僕と彼女

諍 歌油

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

世界を探せばどこにでも見つかるであろう、不幸な少年と外見はいのにぼっちな少女、そんな少し変わった二人が送るひねくれたラブコメ……になるといいな

目次

不幸とはすぐ傍にあるものだ	1
評価とは人の視点ではなく世界の視点で変わるものだ	6
物語とはいつも唐突に始まるものだ	11
いつも人は夢を見すぎている	16
精神的に向上心のない者は馬鹿だ	23
事実は小説より奇なり	30
何処でも誰でも青春が素晴らしいとは限らない	39
幽霊と幸せと言う物は似ている	49
女子は思わぬ所で浮気をうたがってる	60

不幸とはすぐ傍にあるものだ

突然だけど皆様、学校生活は楽しいでしょうか？

僕は楽しいかと聞かれたら楽しくありません。

例えば部活動、スポーツでも何でもそれに没頭するのはいい事で、ほとんどの人は何かしらの部活動に励んでいる事が多い。

でも僕は別に何の必要性を感じないのです。

スポーツや他の文系の部活動でもなんでもいいけど、それが将来に何かの役に立つ事なんて、それこそその道に対してのプロフェッショナルになれる天才とかならないけど、そう言う人はごく一部だ。

もちろん将来に役立つとかは、どうでも良くてそれに打ち込む事が重要と言う人はいるし僕は別にそれを否定するつもりはない、ただ僕がそれをどうでもいいと見るだけだ。

こんな事を言ったけど別に僕は部活動の話をしたい訳じゃない。

今までは、物の例えで僕が話したいのは学校生活は楽しいか、という話だ。

まあ良くも悪くも、部活動にしろそれ以外にしろ、なにかに打ち込むにしろそうでないにしろ、学校とは順位なんてものがあるのだ。

俗に言うスクールカーストなるものがあるのだ、きつとそれは、人間の性と言うものだろう。

動物は群れの中に順位があるように人間にもあるのだろう。

それを止める事は出来ない、まあ色々言っただけど僕が言いたい事を先に言うと、

「不幸だ……」

僕がそんな事を言うと周りのクラスメイト達はまるで家の中で一瞬幽霊でも見たかのようにちよつと静かになった。

僕は別に何もしてないというのに、何故こんなに静まり返るのだろうか。

まあ今までの話をしたのも、なんでクラスメイトからこんな扱いをされてるのも入学式、今僕は高校二年生の五月なので、一年と一ヶ月ぐらい前？に遡る。

「塚 祐太・さかい ゆうた・です。これからよろしくお願いしま
す」

あの時、高校生になって初めての挨拶は、そこそこ上手くいったはずだ。ちなみにどうでもいいが僕の名前の祐太の『祐』は神様が右手を差し出して助ける的な意味があるらしい。

まあ神の右手がどうかは置いておいて、こんなどこにでもいそうな名前を紹介して、僕はそこそこ楽しい高校生活を送る筈だったんだけど、残念な事に僕は誰にも話しかけられる事はなく友達なる物が出来る事なんてなかった。

いや、話しかけられる事はたまにあつたんだ。例えば、
「塚君、この前の旅行でお土産持ってきたから皆に配ってるんだけどいる？」とか、

「なあ塚、体育の組一緒に組もうぜ」とか、
そんなどうでもいい事ばかりだった、まあでも人間の関係を築くのには、こう言う事が必要なのだが、僕は素っ気ない答えをしていたのだ。

例えば、さっきの二つなら、
「いらない」とか、
「嫌だ」とか、

二つ目に関しては、素っ気ないと言うより拒絶と言うべきだが。
とにかく、今思えばそれが原因と考えられるが僕は寂しい高校生活を送るようになった。

そして、時が経つにつれて僕の噂は広がっていった。
噂と言ってもいい噂ではない。

何処から聞いた噂だか、どうやら僕は皆から中二病と思われているらしい。

僕は確かに物思いにふける事が好きなのでよく考え事をしている、だから僕は休み時間なんかは、誰とも話さないうで物静かに過ごすのだが、それとさっきの素っ気ない返答のせいで、僕は孤独を気取ってる

中二病と思われているらしい。

なんで静かに暮らしているだけで孤独を気取つてると解釈したんだ!!と言いたいけど、高校生とはよくわからない生き物らしいのでしかたない。

他にも茶髪に染めるとか、パーマを作つてるとか、なんでかわからないけど噂がひとり歩きしてこんなになつてしまった。

茶髪もパーマも全部地毛だつて言うのに迷惑な話だ。

しかもイケメンならまだしも顔は普通なので頭髪は全部キャラ作りだと思われさらに噂を酷くしたらしいのだ。

高校生にもなつて中二病だったらそりや友達も出来ない訳だ。

まあ要約すると、不幸に不幸が重なつて今の寂しい高校生活を送るはめになつてる訳だ。

これを不幸と言わずしてなんといいのか。……まあ半分くらいは、僕にも原因があるけど。

まあいいや、今更こんな事を考えても何も変わりやしないのだ。

それに不幸なんて今に始まつた事じゃない、車に引かれたことなんて何回もあつたし、受験の時に学校側のミスで受験の時間が遅く知らされていて第一志望の高校に入学できなかったし、こんな不幸はよくある事だ。

そんな悲しい事を考えながら僕は今日も寂しい、どこにでもある学校生活をおくるのだった。

.....
極普通の放課後の話だ、学校帰りの途中で不良に絡まれたり、不良から逃げた先の公園にどこの悪ガキが作ったのか、めっちゃ浅い落とし穴があつてそれにはまつて転んだり、そのせいで不良に捕まって財布にある金を全部取られてボコボコにされたりしたのだが、それはよくある事だ。

とにかく僕は金を取られて金がないからゲームセンターに行く事も出来ないの僕は図書館に行く事にした。

なぜ図書館に行ったかと聞かれたらわからない。

他にも行ける所はあった筈だ、けどなんとなく図書館に行ったんだ。

僕が図書館に着くと一人女の子がいた。

特に特長はみられない、いやひよつとしたら凄く可愛いのもかもしれないがなにせ下を見て本を読んでいるので顔は見えないが、ぱつと見た感じでは特長はないのだ。

こんな所に誰と来た訳でもなく女の子が一人とは、ひよつとしたら僕と同じなのかもしれない。

まあいいや、どうせ僕と話す事なんてないし。

さて、何を読もうか、『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている』かな？同じぼつちの話だし、それとも今日はラノベじゃない小説を読もうか、

「あの……すいません」
「ん？」

誰だこの可愛い子は？こんな可愛い子と僕は知り合いな訳がないし、それに片目に眼帯をしているとなるとさらにわからないぞ？ひよつとしてさつきの子かな？

「なんででしょうか？」

「えつと、二年B組の堺さんですよね？」

ありや？同じ学校？こんな特長的な子いたっけな？

「そうだけど」

「はじめまして私、一年A組の米田 晴香・まいだ はるか・です」

「えつと……何処かで合ったっけ？」

「いえ、合った事はないんですけど、その……噂で、」

あーなるほど、そりゃああれだけ噂が広がったら僕の事を知ってる人も少なくはないか、ひよつとして僕って有名人？

「あつそう、それで僕に何の用？」

「す、すみません、ちょっと堺さんと話して見たくて……それで要件なんです……」

どうでもいいけど、やけにオドオドしてるな。

「私の財布知りませんか？」

この子ひよつとして僕が金を不良に取られたのを見てたのか？そして財布がないから僕が盗んだと思ひ込んでるのか？だとしたら相当失礼だな。

「知らない」

「そうですか……じゃあ一緒に探してくれませんか？」

「嫌だ」

「お願いします!!」

「なんで僕が君の財布を探さなきゃいけないのさ」

「確かに助けてもらう義理は有りませんが、けど大切な物なんです」

「そりゃあ金が入っているんだ大切な物でしょ」

「お金だけじゃ有りません、あれはおじいちゃん、お爺さんの形見なんです」

へー形見なのか、まあなんでもいいか。

それにしても、勢いで「お金なんてどうでもいいです」みたいな事言ったら即座に論破してやろうと思ってたのに。

「それで、その大切な形見をなくしたと？ずいぶんとお粗末な大切だね」

「す、すみません……けどお粗末でも一応大切なんです、だからお願いします」

自分の大切な物をお粗末と言われても怒らないで認めると……いいね、さっきの金の事を勢いで大切な物じゃないと言わない所といい、人間性として僕の好みだ。

「わかった、気まぐれだけど探してあげる」

「本当ですか!？」

「うん」

はあ、まったく金を取られたあげくこんな厄介事に巻き込まれるなんて、

「不幸だ」

評価とは人の視点ではなく世界の視点で変わるものだ

皆さん、自分が他人に対してどう思われてるか気になった事は、ありませんか？

僕は特に気にした事は有りませんが、他の人はそこそこ気にした事があるんじゃないでしょうか？

自分がどう思われているかは、結構大切な事だとは思うけど、結局は世界全体がどうその人を見るかによって変わるものだと思はします。

人間と言う物は悲しい事に周りの意見に簡単に左右されてしまうものなのです。

仮に自分が世界で一番イケメンだとして、実際に世界には自分以上のイケメンはいないとしても、もし世間が、世界が、自分をカエルのような顔だと判断したとしたら自分はカエルのような顔と言う事になるのです。

なにせこの僕も不幸な事に、誰がそう呼び始めたのかは知らないが高校で中二病扱いされているのだ。

僕ほど平均的な人はこの世で一人もいないだろうに。

まあとりあえず最初に言った通りに物事が運ばれるのなら今の僕の現状は相当、僕にとって不味いはずなのだ、なにせ……

「堺さん、私の財布見つかりました？」

右目に眼帯を付けてるいかにも中二病な可愛い女の子と一緒に財布を探しているのだから。

大体、今時眼帯付けてる中二病の模範見たいな人いるのかよ？

「堺さん？」

「ああ、ごめん考え事してた」

あーあ、なんで僕はこんな見ず知らずの女の子なんて助けてるんだ？こんな所を学校の人に見つかったらもっと酷い噂が流れるに決まってる。

何故こんな事になってるかと言うと、ほんの数十分前に遡る。

前回色々な不幸が僕に襲いかかって来てこの女の子の財布を探す事になったのだがそこまでは良い。

問題はその後だ、僕は当初財布がすぐに見つかると思っていたのだが思いの他見つからず、あちこちを探した。

本棚の隙間や机の下、落し物がないか係の人に聞いたが見つからず終いにはトイレの個室まで調べたのだが一向に見つからない。

このままだと、さつき言った通り僕の学校の人が来て僕にもっと酷い噂が流れてしまう。

普段から他人の評価なんてものを気にしない僕でもさすがにこれ以上はイジメとかそう言う事に繋がる恐れがある。

いくら僕でもそれはゴメンだ。

仕方ない、探すんじゃない見つけよう。

「米田さん、その財布が無くなったのはいつぐらい？」

「えっと……本を読んでいる途中で鞆に入れていた携帯がなかったので鞆のなかを見た時に気付いたからそれよりも前だと思います」

「それよりも前ってやつは、何処で何をしてたの？」

「図書館に来る前は家に居ました、そこからまっすぐ図書館に着いて本を読み始めました」

「じゃあただ単に家に忘れただけじゃなくて？」

「それは有り得ません、財布はいつもその鞆に入れてるので」

「いつも？学校帰りに寄り道したりする時に不便じゃないの？」

「いえ、私は友達がいないので寄り道なんかはしないで問題は何りません」

「ああ……そう……」

なにか今悲しい事をさらっと言われた気がするのだが。

まあいいか、悲しい事に米田さんの言う事は多分正しいのだろう。

となると、今一番嫌な結末は……

「米田さん、その鞆を見せてよ」

「あ、はいわかりました」

そんな緊張感丸出しの返事をして米田さんはその鞆を僕に渡した。

……僕ってそんなに緊張する相手かな？

鞆を見るといかにも女子高生って感じの普通の鞆だったもつと黒魔術的な（どんなやつだよ）が出るのかと思っただら違ったようだ。

「なにか分かりましたか？」

「わかったって言うかなんと言うか……中身を見てもいい？」

「は、はい」

僕は米田さんの許可を貰ったので、さっそく中身を調べた。

中身は、携帯にペットボトルの水に多分お気に入りの一冊の本、そして変えの眼帯と思われる物か。

確かに財布は無い様だった……眼帯ってファッションに含まれるのかな？

「確かに財布は無いみたいだね、この中には」

そう言う僕が隣のチャックを開けた。するとどうだろう、なんと財布があるではないか。

「凄い!!どうやって見つけられたんですか!？」

「そんなの簡単だよ。米田さんの言ってる事は多分正しい、そしてその行動のなかでは鞆に穴が開くか相当に手馴れたスリの達人がいなきゃ財布は無くならない、見た感じだと穴は空いてない様だしそんなスリの達人なんてそうそう合わないだろうしね」

「じゃあそこからどうして他のポケットにあると？」

「そこも別に難しくくないよ、ただ今僕にとって何が一番不幸かを考えただけだ」

「不幸？」

「そう、だってそうだろう？何処の誰かわからない人に探し物を手伝わされて散々探した結果が別のポケットに入っていましたなんて不幸以外のなにもでもない。」

まったく僕の不幸も少しは収まってくれないかな？まあでも米田さんの財布が見つかっただけ良しとしよう。

それにしても僕は今日もいつも通り不幸だな、不幸過ぎてなんていうか……

「不幸だ」

翌日、僕はまたもや孤独な昼休みを過ごしている。
変わった事があるとすれば珍しく中庭で昼食を食べている事くらいだ。

昨日は出来の悪いミステリーを解決した後、米田さんに礼を言われて特に何も無くそれぞれの日常に戻っていった。

まあ出会いがあれば別れがあるものだ、そのせいで一期一会なんて言う下らない言葉が出来たわけで、今回はその別れが早かつただけだろう。

「堺さ〜ん!!」

僕が出会いと別れなんて言ううちよつと聞いたただけだと壮絶っぽい事を考えてると何処かで聞いたことのある声が聞こえてきた。

声のした方を見るとなんとビックリ、米田さんが僕の前に立っていた。

僕にしては珍しく別れがまだ来てないようだ。

「どうしたの米田さん？」

「あ、えつと、またちよつとお話をしたいなと」

「ふ〜ん、まあ別にいいけど」

「そうですか、改めて昨日は有難うございます」

「そんなに固くならなくてもいいよ、不幸に巻き込まれるのはいつもの事だしね」

「……堺さんってそんなに不幸なんですか？」

「ああ不幸だね、僕の人生はルナティックモードだからね」

「るなていつくもーど？」

「難易度のことさ、ハードモードよりもめっちゃ上だとおもえばいいよ」

「ええ!!それってすごく大変じゃないですか!!」

だからそう言っているのだ。

「で? 用件かなにかがあるんじゃないの？」

「凄い!! どうしてわかったんですか!!」

「どうもこうも、僕に話しかけるなんてただお喋りしたいだけなんて事があるわけじゃないか」

「そうですか？私は堺さんと話していると楽しいですからただ話すだけでもいいですよ？」

「はいはい、そんなどうでもいい事は置いておいて用件はなんなの？」

「えつとですね、堺さんに頼みがあつて話かけたんです」

僕に頼み事か、なんか嫌な予感がするな。

「で、その頼みとは？」

「はい、私と……」

「私と？」

「一緒に……」

「一緒に？」

やけに長いタメを作つたあと米田さんは何かを決意したような表情で頼み事を口にした。

「私と一緒に部活を作つて欲しいんです!!」

「……………は？」

物語とはいつも唐突に始まるものだ

皆さん、アニメやライトノベルは読みますか？読まないなら小説でも映画でもなんでもいいです。

あの物語達は、主人公を中心に回っていますよね？

例えば最近の流行りなら今よりも少し先の近未来ってやつで、ゲームに感覚を共有してデスゲームに巻き込まれるのとか、謎のウイルスが拡散されて街がゾンビだらけになるとか。

そんな絶望的な状況の中で一般人のはずの主人公は戦うわけです。

とにもかくにも物語と言う物は主人公が巻き込まれて世界の命運が掛かった戦いになり出されると言うなんとも不幸な内容が多い。

かく言う僕、堺 祐太も自分の事をめっちゃくちゃ不幸だと自覚している訳で、中学生ぐらいの時は本物の中二病も少しは混じってた事もあって、いつでも学校にテロリストが来たり、周りの人達がいつゾンビになってもいい様に脳内でシミュレーションしてたりしたけど。

まさかこんな形で物語が始まるとは思ってもしなかったよ。

「で、なんで僕と部活なんて作ろうとしてるのかな米田さん？」

「ダメですか？」

「ダメとかどうとかは、一旦置いておいて、なんで僕なの？」

「それは堺さんとなら一緒にやって行けると思ったからです」

「なんでそう思ったの？」

「なんでって、昨日財布を見つけてくれたじゃないですか」

「……それだけの事で？」

「それだけの事って、私かなり緊張してたんですよ」

「そんな理由なら別に僕じゃなくても良くないの？誰かほかの人を探して誘えばいいじゃないか」

「それは無理です!!」

「どうしてさ??」

「私、こんな格好してるから友達がいまぜん!!」

「……そう言えばそうだった。」

米田さんは可愛さなら百点満点が付くぐらい可愛いけどおそらく

眼帯をしてるから友達ができないのだった。

「じゃあその眼帯を外せば良いじゃないか」

「いえ……あの……それは……」

ん？この反応からしてなにか訳でもあったのだろうか？

だとしたら申し訳ない事したな。

「ごめん気に触ったなら謝るよ」

「いえ、良いんです。それよりも一緒に部活を作ってくれる気にはありませんでした？」

「……ちなみに何の部活を作るの？この学校は部活動はある程度揃ってあると思うんだけど」

「はい!!私、じつは昔からある事がしたかったのです」

「へへ、それでそのある事ってのは？」

「人助けです」

「……人助け？」

「そうです!!情けは人の為あらずって言うじゃないですか」

「……それって一応言うけど、情は人になると巡り巡って自分に帰ってくるから積極的にしろってことだよ？」

「はい、ですから人に恩を売って自分も楽が出来て、他の人は助かる、素敵な事じゃないですか」

うん、この子も大概だったようだね。

「断る」

「なんでですか!？」

「なんでもなにも僕にメリットがないじゃないか」

「そ、そんなあ……」

キーンコーンカーンコーン

どうやら昼休みが終了したらしい

「じゃ僕のクラス次の授業、移動教室だから」

「あ、ちよつと……」

さり際に米田さんの呼び止める声が聞こえた気がするけど僕は無視する事にした。

「で、これはどう言う訳だい米田さん？」

「部活の勧誘です」

「まだ部活作れてないよね」

「あら？じゃあこの場合なんて言うんでしよう？」

しらねえよ。

なんで僕がこうして放課後も米田さんと一緒にいるかと言うとこれまた数分前の不幸に遡る。

昼休みの一件を終えて僕は五時間目と六時間目が終わって帰りのホームルームを終えて僕は平和な日常に帰って自宅の自室で二ト万歳とでも言うかのようにゴロゴロする筈だったのだ。

ところがそんな僕の前に例の問題児、米田さんが現れたのだ。

その勢いたるやまるでドラクエで言う所の

マイダガアラワレタ!!

とでも言い出しそうな勢いだった。

しかも登場してからの第一声が

「塚さん、この前の一件で話があります」

と言うセリフと共に現れたのだ。

普通ならまだ「ああ塚がなにかやらかしたのか」って程度にしかないが、僕は前述した通りおそらく全校生徒から中二病と思われる上、眼帯をしている美少女が現れたのだ、普段から僕に関わらない様にしてるクラスメイト達は僕達のこの様子を見て「中二病がなにかやらかす気だ!!」とでも思ったのだろう。

掃除もせずに、そそくさと教室から退散した。

結果僕は、掃除当番でもないのに教室内の清掃や今日たまたま割り当てられていた廊下の雑巾がけ三往復とその他もろもろの掃除を米田さんと二人つきりでやらされ、その中で米田さんから昼休みの話を永遠と聞かされてると言う訳だ。

はあ、回想して思ったけど僕は相変わらず……

「不幸だ」

「どうして部活に参加してくれないのですか？」

「だから僕にメリットがないでしょ」

「メリットなら有ります」

「例えば？」

「人に感謝されて嬉しい気持ちになります」

「そんな微妙なものはいらない」

「他にもまだ有りますよ」

「じゃあ他には？」

「それは自分で見つけてください」

「……はい？」

「なんでもかんでも他人に答えを求めてはいけません。自分で見つけて初めてためになる物もこの世にはたくさんあるんです。それがなにかは人によって違いますますがそれでも自分で見つけた物はきつと無駄にはなるません」

「……つまり分からないから自分で理由をさがせと？」

「まあ大雑把に言うともそうなります」

「わかったよ、ただし条件がある」

「条件？」

「僕は確かにその部活に入るけど正式には、まだ入らない仮入部ってやつだ、そしてそれで何日か過ごして気に入ったら正式に入部するって言う事にしよう」

「わかりました、堺さんが入部する時を楽しみにしてますね」

「はあ、めんどくさい事になったもんだ。」

「まあこうなったらサツサと仮入部でつまらないと言ってやって米田さんとは、もう関わらないようにしよう」

「では早速行きましょう」

「……は？」

「行くってどこに？」

「人助けにです」

「ごめん、意味がわからないんだけど」

「だからもう依頼が来てるので人助けをするんです」

「依頼が来てるってまだ正式に作れてない部活だぞ!？」

「ほら行きますよ」グイ

「やめて、僕はまだ働きたくないんだ!!」ズル

「何わけわかんないこと言ってるんですけど、ほら行きますよ」

「クソ、不幸だー！ー！ー！ー！ー！ー！」

!!!!!!

.....
僕は今図書室にいる、名前はまだ無い。

なんてふざけるのはやめるとしよう、なにせ僕は今働かなくてはならないのだから。

どうやら此処、図書室で不思議な事が起きてるらしい。

「では、その不思議な事と言うのを教えて下さい」

「は、はいえつと不思議と言えば不思議なんですけどそうじゃないと言えはそうじゃないんです」

米田さんが食い気味なせいかはたまた、菅原 亜由美（すが あゆみ）さんが単に人と関わるのが苦手なだけか。……眼鏡なのも相俟って余計に気弱そうにみえる。

「そんな前置きはどうでもいいから、何が不思議なの？」

「ひゃい!!えつと本の貸出の事で不思議な事が起きてるんです」

「堺さん、そんなに怖い顔で話すと皆怖がっちゃいますよ？」

誰のせいでこんなに機嫌が悪いと思ってるんだ。

「はあ、すみませんそれで何が起きてるんですか？」

「それが、本の貸出でいつも同じ本が同じ人達に曜日ごとに貸し出されてるんです」

「曜日ごとって？」

「はい、図書委員としてはこう言う行為は本にイタズラなどがされないか心配で、でも聞き出すことも出来なかったのでこうして相談させて貰いました」

「堺さん、一緒に謎解きしましょうよ」

まったく昨日に引き続きまたミステリー系かよ……

本当に僕は……

「不幸だ」

いつも人は夢を見すぎている

皆さん、突然ですが読書は好きですか？

僕は大好きです。

本の世界の中では僕を中二病扱いするクラスメイトもないし、やたらと意味の分からない部活に勧誘してくる同級生もない。

つまり現実の世界から逃げれるのです。

しかし逃げた所で結局は現実に戻って来なければいけません。

なのでいつもそこそこ長い僕の哲学モドキのオープニングトークはこのくらいにして僕はまた意味の分からない謎解きに挑まなきゃ行けないわけで……

「堺さん、何かわかりました?」

この人助け部なる物を作ろうとしてるこの眼帯美少女の米田さんをどうにかしなきゃいけない訳だ。

「いや、本の種類も何も分からない状況でなにかわかる訳ないでしょ」「は!!それもそうですね。亜由美さんその本の資料やその本の特長がわかるものがあつたら持つてきてくれませんか?」

「は、はいすぐに持つてきます」

そう言うと菅原さんはその本の資料的な物を取りに行った。

「本の資料なんかを取らせるなら本そのものを持つて来てくれた方が早くない?」

「堺さん、本は毎日一日事に返却されて曜日ごとに恐らく担当になってる人に貸し出されてるんですよ?もう忘れたんですか?」

「うっ……」

そう言えばそうだった。

毎日本は貸出と返却がされていて先ほど米田さんが言ったように恐らく担当になってるのだろう人が曜日ごとに借りている、つまり同じ五人が曜日ごとに同じ本をループで借りたり返したりしてるわけだ。

「持つてきました!!」

菅原さんが持つてきたのは購入した時の請求書と図書委員の人間

が書いたのだろうポスターだった。

「えっと、どうやらミステリー小説の短編集が一冊借りられてるらしいね」

「タイトルだけでよく分かりましたね」

「昔読んだことあるからね」

「そうなんですか、所でなにかわかりました?」

「だから気が早いつて、菅原さん他にこの本の特長はありますか? 例えばクリスティーの時代に作られたとか」

「うくん特に特長と呼べるものは……強いて言うなら初心者向けと言うことぐらいですね」

「借りていった人がわかる物は?」

「はい、これです」

おお、準備がいいな。

なになに借りてる人は……

一年D組 坂本 光一 (さかもと こういち)

三年B組 高田 陽菜 (こうだ ひな)

二年A組 青野 凜子 (あおの りんこ)

二年C組 小野塚 小町 (おのづか こまち)

一年D組 菊池 真結 (きくち まゆ)

「学年はバラバラ、名前的に殆どが女子で同じクラスなのが最初と最後の人だけか、これだけだと何もわからないね」

「この人達になにか共通点のような物はないですか?」

「残念ながら僕は友達がいらないから分からないね」

「ちなみに何週間借りられてるんですか?」

「えっと確か五週間程です」

「結構長いな……」

「そうだ!! こう言うのはどうですか」

おっ!! どうやら米田さんがなにか思い付いたらしい、もうそろそろ帰りたくなってきた頃だ正解してくれよ米田さん。

「占いです、例えば『今日のラッキーアイテムはミステリーの短編集、鞆に入れて持ち歩くと運命の出会いがあるかも』なんて占いがこの日

にあつたんですよ。この本を借りてる人は殆どが女性ですから占いを信じてる人も多いと思います」

おく実に米田さんらしい、まるであつてるようで……

「絶対に間違つてる」

「なんでですか!?!」

「米田さん自分で言った事を忘れたの? これは五週間毎日欠かさず借りられてたんだよ? 毎日同じ占いを五週間続ける占いなんていくら何でも出来が悪すぎる、それに女子だからって占いを信じる訳でもないでしょ、ほら米田さんにも占いを信じない友達ぐらいいるでしょ」

「私は友達がいないのでそう言うのは解りません!!」
「あつそう……」

とは言つても、僕も別にになにかわかつた訳じゃないしな、ここは大
人しく諦めて帰りたい所なんだけど……

「あの……」

「ん? どうしたの菅原さん?」

「坂本君と菊池さんは同じ演劇部です」

……なんだつて?

「それは本当なの菅原さん?」

「はい、二人とも私の友達ですから」

友達か……二人もいるとは羨ましい。

「それなら話は簡単だよ、うん実に下らない結末だ」

「なにかわかつたんですか堺さん!?!」

「わかつたも何もここまで来ればわかるよ」

「?。」

あれえー?なんで分かつてないのかな?

「演劇部の部室に行けばわかると思うよ」

「分かりました行つてみましょう」

.....

僕達は今演劇部の部室に向かつてる。

今回の謎の解明をするためなのだが……

「堺さん、そろそろ何がわかったか教えて下さい」

「その……私も気になります」

二人がうるさい。

「わかったってば」

ていうか菅原さん図書当番ほっぽり出してよかったの？

まあいいや、今は二人を納得させないとねこれ以上騒がれるのは面倒臭いし。

でもミステリーと演劇部まで来ればわかると思うんだけどな。

「まず第一にあればミステリー短編集そこまではOK？」

「はい大丈夫です」

「じゃあどう言う時に短編集を借りるのか、もっと言うならなんでも普通のミステリー小説ではなく短編集を借りるのか、二人ならどう思う？」

「軽い頭の体操をしたい時？」

「早く色々な種類の事件を見たいからですかね？」

「二人とも間違っていない、けど僕ならミステリーの資料が欲しいからって考え方がある」

「その考え方ならそれこそ普通のミステリー小説を読むんじゃないですか？」

「それは後々分かるよ」

「そして第二にどうして毎週曜日ごとに借りて返すのか」

「はい、そこが一番分からないですよね亜由美さん」

「は、はいそこが一番の謎です」

「そう、そこが問題だ。だからそこを考えよう」

「まずこの坂本って人と菊池って人は同じ演劇部なんだろう？だとしたらかなり謎の答えに近づける。」

「どう言うことですか堺さん？」

「もしこの本を借りた人が全員演劇部だと仮定したら簡単だよ、同じ部活の中で共有して使っていたんだよ」

「……共有していたと言うと？」

「例えば、この内容は面白いとか、この内容はダメで使えなそうとか」

「あの……そうだとしてもわざわざ次の日に返しますか？」

「恐らく当番制にしたのはそれとも関係あるんだろうね、この当番制を作った人はその人が借りた本を無くしたり忘れたりするのを恐れただ、だから当番制にしてわざわざ次の日に返すようにして少しでも無くしたりする可能性を無くしたかったんだろうね」

「なるほど……」

「じゃあこの本はどのような目的で使われてるんですか」

「そこが第三の謎だね、まあこれに関してはもうわかると思うけど」

「むう……勿体ぶらないでください」

「わかったよ、じゃあ最終ヒントねこの小説は初心者向けの小説なんだ、つまり読者にかなり分かりやすいように難易度を抑えてるってことだよ？」

「……っあ!!」

どうやら菅原さんはこの謎が溶けたようだね。

おっと、そろそろ演劇部の部室に着くな。

「ん……わからないです」

「はいじゃあ答え合わせと行こう」

僕はそう言う勢いよく部室のドアを開けた。

その中では当たり前前だけど物凄い熱気で演劇の練習をしていた

……

「……あ!!」

そう借りた本を元にした内容で。

……

「すごいですね塚さん、今回も見事に謎を解きましたね」

「別に凄くはないでしょ」

僕達は今、菅原さんにお礼を言ってもらった後一緒に下校している。

菅原さんの感謝の言葉は素直に嬉しかった。……癪に障るが。

「でもどうして小説から演劇を作っていたのでしょうか？」

「それはもう直ぐ文化祭が近いからかな？」

「文化祭はもつと先では？」

「まあ演劇部の事情は知らないけど配役とか色々準備とかがあつて台本は早目に作んなきゃいけないんじゃない」

そう、今回の謎の答えは簡単に言うとは演劇部で新しい台本を作らなきゃいけないやつてその初心者向けで分かりやすい簡単に参考にするネタになる本を週で当番を決めて貸出したり返却したりしてたつて訳だ。

こんな変な内容に巻き込まれるなんて……

「不幸だ」

「それにしても堺さんが本が好きなんて以外でした」

「別に以外でもないでしょ、好きじゃないならわざわざ図書館なんかに行かないだろうし、それともなに？僕がスポーツ少年だとも思つたの？」

「いえ、そうじゃなくて、堺さんは何事にも興味がなさそうなので」

ひどい偏見だ。

「まあそう見えても仕方ないか、本は好きだけど苦手だからね」

「どうしてですか？」

「まあ昔色々あつたんだよ」

「何があつたんですか？」

どうしよう、別に話してもいいんだけど……まあいいか

「僕は昔、小説を書いた事があつたんだ」

「そうなんですか!!すごいですね!!」

「別にすごくなんか無いよ、それに書いた事あると言つてもネットに小説を投稿するヤツなんだよ」

「それでもすごいですよ」

「まあそれは置いといて、まあなんやかんで僕は小説を投稿していったんだ、わずかだけどお気に入りなんかもされていただけだけどそれよりも多かったのは誹謗中傷だ」

「誹謗中傷？」

「そう、僕の小説はそこまで面白く無いらしくてね、毎日つまらないやら投稿止めるだの色々と来たんだ、それがどうも頭から離れなくてね

小説は好きなんだけど苦手なんだよね」

今でもたまにその光景を思い出してしまう。

「じゃあなおさら堺さんはこの部活に入ってください」「は？」

「だってこの部活に入れば小説のネタが沢山入ってきますよ、なにせ人の助けをする部活なんでもん。だからこの部活に入って今度こそ面白い小説を書きましょう」

……はあ、やられたな。

これだから米田さんは苦手なんだ、馬鹿なのに、何処か抜けてるの
にいつもこう言う時に鋭い事を言ってくる。

「……はあ、わかったその誘い乗ってあげるよ」

「本当ですか!!やったー!!」

ここまで素直に喜ぶ人も珍しい気がする、僕が途中で気が変わった
らどんな反応をするのだろうか。

そう皆そうだ、米田さんも今回の演劇部の人もひよつとしたらあ
中にプロの俳優を目指したりまたは脚本家になろうとしたり、僕みた
いに小説を皆に読んでもらって評価されたいと思ったり。

誰だって、いつだって人は夢を見すぎている、でもその夢は儂い。

だから僕はこんな興味のなさそうな顔をしているのだろうか。

それでも僕はまた米田さんのせいで夢を見てしまった。

なんと言うか……

「不幸だ」

今後が楽しみだよ。

精神的に向上心のない者は馬鹿だ

精神的に向上心のない者は馬鹿だ。

あの有名な「吾輩は猫である」や、「坊ちゃん」を書いた作者、夏目漱石の作品の一つである「こころ」の一部分だ。

僕はこの作品を読んだ事が無いが、なんでも主人公はこのセリフを自分の親友のKに言ったらしい。

どうやらこの作品の主人公と親友Kは一人の女の子を奪い合っていたとか。

僕はこの後のKの行動を賞賛したいのだ。

なんとこの後Kは自殺をしたのだ。

ここで勘違いしないで欲しいのは、僕はなんにも自殺をした事自体を賞賛したいのでは無い。

では、なにを賞賛したいかと言うとKの自分の価値観やあるいは人生観、いわば個性と言う物やあるいはそれよりもっと大事ななにかをKは自分の意思で守った事と、そして主人公の言葉を聞いて素直に自分では意中の女の子を守れないと考え、その身を引いた事を僕は賞賛したい。(注：祐太の個人的意見です)

これは、これからの世界にもとても重要な事と言える。

今、日本は個性が大事と言われてゆとり教育に移行したあと、また元の教育方針に戻ろうとしている。

別に僕は個性がどうか言うつもりはないが、今の若者に見て欲しいのだ、このKを。

このKは自分の個性を自分の身を守る為には使わずに、自分の個性を守る為に自分の命を犠牲にしたのだ。そして理解しても欲しい、個性は自分を守るものでも、自分を表現するものでも無い、個性とは自分が守らなければいけない、無くしてはいけない自分の意思だと言うことを

そして大人達よ見て欲しいのだ、ゆとり教育がダメとかそんな判断は下さないで、彼らの持った個性を彼らが本当に大切にしたい個性を。

「と言う訳で先生、部員の数があった一人足りないと言うだけで部活

を作れないと言うのはおかしいと思います」

「ダメだと何度言ったらわかってくれんだよ……大体今のはなんだ？個性だか夏目友人帳がどうか」

「大人の権力を理不尽に振るう事に対する軽い反抗と、これからの学校生活、ひいてはこれからの人生に対する僕の意見とか意思とか、そういう感じのものです。あと先生、夏目漱石と夏目友人帳を間違えるのは国語の教師としてどうかと思います」

「良いんだよそんなこまけえ事はよお、それよりもお前、夏目友人帳見てるのか？」

「先生、話をそらさないでください」

「おお悪いな、まあとにかく部活をつくるには最低でもあと一人部員を確保する事だな」

「くうくうこの笹原・ささはら・先生のエロ眼鏡くう」

「おい、俺は眼鏡を掛けてねえだろうが、それと俺はこう見えて紳士だ」

「先生の何処が……」

「……一年の時の期末テストの社会科」

「ギク!!」

「口でギクつて言うヤツなんて初めて見たぞ……」

くそ、この先生に残念な事（いや、本当にまじで）で僕は貸しがあるのだ。

僕は自分で言うのもなんだが学業はそこそこ出来る方だ、十一教科のすべての平均点が七十五点は毎回いくのだ。

しかし、社会科だけはどうも苦手で一年の時の一回目のテストは学年最低の三点をたたき出した。

そこでこの笹原先生（国語科）に頼み込んで期末テストを赤点回避させてくれたのだ。（ちなみに冬休み期間であるクリスマスにすら自宅に呼んで教えて貰った事から、1225事件と僕の中では呼ばれている）

「とにかく部活は三人でつくれ、わかったな」

「わかりました。先生、最後に一つ良いですか？」

「ん、なんだ？」

「部活が三人な事になにか意味はあるんですか」

「ああそれか、それはな……」

笹原先生も一応は教員だそれなりの理由がある筈だ。

いや、あつて欲しい。

「スケツ○ダンスしかり銀○しかりやつぱりトリオものつて良いよ
なつて言う考えからだ。」

……やつぱりこの先生には期待しない方が良い。

……

「と言う訳で部活を作るためにはもう一人部員が必要らしいよ、米田
さん」

「はあ、まあ大体はわかりましたが……」

僕がなぜ初っ端から先生とコントをしていたと言うと、

見れば分かる通り、部活を作るためだ。

この前、愛無き愛読書の謎を見事に解いた僕はなんやかんやで結局
米田さんに説得されてしまって部活に入る事にしたのだが、先生に部
活を作りたいと言ったら、ジャンプ愛読者である自称紳士の笹原先生
に「部活を作るなら三人でつくれ」と言う事らしい。

おそらくは僕と米田さんが作るうとしていた部活である『人助け
部』が、まあ名前の通り人の手助けをする事は分かると思うが、ジャ
ンプ読者としての血が騒いだのか三人で部活を作れと言うのだ。(米
田さんが眼帯美少女と言うのもあるかもしれない)

「ともかく部活を作るにはもう一人部員がいるのですね？」

「まあそうなるね」

「じゃあ話は簡単じゃないですか」

「ほお、と言うとなにか秘策でも？」

「そんなの周りの人にお願ひすればいいだけでしょ？」

……この子は自分の状況を分かっているのだろうか？

「あのね米田さん、君は部活に入ってくれそうな友達がいるの？」

「いえ、いませんよ」

「僕にそんな友達がいると思う?」

「いえ、そうは思いません」

……事実ではあるがこんななズバット言ってくるとは。

「そうなるよ、大して親しくない人達に回らなきゃいけないよね?」

この場合は僕達に親しい人がいるのかと、思うが。

「ええ、そうですね……あ」

「眼帯をしてる女の子と中二病で関わると面倒臭いと思われてる僕達が勧誘した所で誰も来ないよ」

「そこは盲点でした、流石ですね堺さん!!」

一体全体何が流石ですと言ってるのはわからないが、褒められた事は素直に嬉しい。

「それよりも、部員をどう確保するかじゃない?」

「ああそうですね、どうしましょか?」

「いや、僕に言われても」

「せめて友人でなくても、誘いにほいほい乗ってくれそうな知人でもいればいいのですけど……」

あの、米田さん黒い所が見えてますけど?

それにしても知人か、僕にはそんな人は一人も……

「あ、一人だけいた」

「本当ですか!!」

「ああ、うん」

「凄いです堺さん!!これで部員も確保ですね」

「いや、そうと言う訳でもないんですけど……」

「え、なんでですか?だってほいほい着いて来そうな人なんでしょう?」

米田さんって実は相当黒いのかな?だとしたら僕もそれにやられてしまった事になるけど……米田さんにはめられたとは思いたくないから天然って事にしておこう。

「うーん、扱いを間違えなければほいほい付いて来るんだけどね、その扱いが難しいんだよ」

「と言っちゃ……」

「じゃあ昼休みになったら一緒に会いに行こうか」

「はい、あ!!」

「どうしたの?」

もしかして何か都合があるのだろうか? 友達と一緒に昼食はないだろうから、先生に呼び出しを食らってるとか?」

「知ってますか? 広辞苑によると男女が事前に約束をして何処かに出かける事をデートって言うですよ」

……黒いでも天然でもなく、アザトイのかもしれない。

……
と言う訳で昼休み、僕と米田さんは屋上に向かってる。

どうして屋上に向かってるかと言うと、そいつは屋上にいるからだ。

「それで堺さん、扱いが面倒臭いってどう言うことですか?」

「ああそれね、米田さんはさ僕達はなんで自分に友達が出来ないと思う?」

出来ればあいつとの出会いは思い出したくない、それ程までにあいつはヤバイのだ。……こう言うジャンプの強キャラが出てくるフラグみたいだな。

「それは、私の場合は眼帯を付けてるから変わり者だと思われてるためですね」

「そうだね、僕も同じような理由だ。けど僕達には普通の何処にでもいる一般人だ、けどあいつは違う」

「それってまさか……」

「着いたよ」

僕が止まると米田さんも止まった。

やけに重苦しい空気をこの扉の奥から感じる、これもあいつのせいなのだろうか。

「じゃあ開けるよ」

僕が確認のために米田さんの方を向くと、うなずいてくれた。米田さんも準備万端のようだ。

ゆつくりと扉を開ける中、僕は思っていた。
そうあいつとは出来れば会いたくないのだ。

「待っていたぞ」

だってあいつは……。

「ついに我との契約を果たしに来たか!!」

「本物の中二病だから」

.....

「フフフ……遂に我らの契約が果たされる時が来たのだな、この時を
どれだけ待ちわびた事か」

「僕は別に契約なんか果たしに来てないんだけど」

「ほう、あくまでも自分の道を行くか、それも良かろう」

「あの……」

「なに？米田さん」

「こちらの人は？」

「むむ!!こやつ眼帯で自分の力を抑えてるのか!?相当の実力者のよう
だな」

「ああこいつは野村 大吾・のむら だいご・って言うバカだ」

「その人を突き放すような言葉つかい、相変わらずだな」

「僕と君とは大した付き合いは無い筈なのだけど」

「所で、その女子は何者だ？」

やけに女子の部分が強調されてたきがするんだけど。

「初めまして、私は米田 晴香と言うものです」

「ほう、それで貴様のような実力者が我に何のようだ」

「あの、実力者と言うのは……」

「こいつはどうやら君の事を同士として見てるようだよ」

「は、はあ」

「それで結局何の用だ？貴様達のような実力者がそろうとは……まさ
か遂にヤツらが動き出したか？」

「一応言っとくこの米田さんは一般人だ、まだ覚醒（中二病への目覚
め的な意味で）してないからな」

「ふむ、となると自体はそう重くないようだな」

「あの、堺さん」

僕が大吾と話していると米田さんが僕に耳打ちしてきた。

いきなり耳打ちしてきたものだから少しドキリとしてしまった。

……やはり米田さんはアザトイかもしれない。

「この人は先程からなにを？」

どうでもいいけど、先程はって初め聞いたな。

「こいつは本物の中二病なんだ」

「はあ……」

「それも、魔力とか契約とかそう言うベタなタイプのね」

「そろそろ本題に戻るとしよう」

僕との米田さんのヒソヒソ話を見ていて、痺れを切らしたのか大吾が話を促してきた。

「ああ、そうだね」

「実は部活を作るために部員になって欲しいのです」

「ふむ、部活とな」

「そう、どうやら米田さんは『人助け部』を作りたいみたいだ」

「そうか、良かろう」

「本当ですか!!」

「ただ……!!」

ほら来るぞ、こいつが大吾が相当面倒臭い由縁が

「我と勝負して勝ったらだ!!」

はあ、大吾に会う羽目になった挙句にこいつとの勝負に付き合わな
きや行けないなんて……

「不幸だ」

事実は小説より奇なり

皆さん、事実は小説より奇なりって言葉聞いた事ありますか？

この言葉は世の中の出来事は虚構である小説よりもかえって不思議である、と言う意味です。

僕は何処にでもいる普通の高校生なので、世の中の事で小説よりも不思議な事と認知したり出くわした事は無いのですが、僕はたった一つだけそれを納得してしまいうような出来事にいつも出会ってます。

「……それで勝負と言うのは？」

「なーに簡単だ、我とコイントスで勝てばいいだけの事だ」

「お前、僕がそういうのに……」

「なんだ簡単なことじゃないですか、堺さん早くやってください」

「ちよつと米田さん、なにを言ってるの!？」

「そうだ、祐太よ早く勝負を受けろ」

「お前卑怯だぞ!!」

「何してるんですか？勝てば良いんですよ？」

「ちなみにコインをどっかに弾いたりして表か裏か分からないと言って他の勝負にしようと言うのはなしだぞ」

チツ、いい感してやがる。

「……はあ、どうなっても知らないよ」

「何の事ですか？」

「ではやるぞ」

そう言うで大吾の奴は10円玉を差し出してきた。ちなみに数字の書いてる方が裏で絵の書いてる方が表だ。

「我は裏だ」

「じゃあ僕はそれ以外だ」

大吾は10円玉を思いつきりはねた。

しばらくすると大吾の手に収まって、結果を確認するために手を開いた。

あ、そうそう途中で終わった事実は小説より奇なりの話の続きなんですけど、このコイントスの結果を見ればわかると思います。

「ふふふ、我の勝ちだな」

裏だった。

この通り僕は、こう言う運の賭け事は絶対に負けてしまうのです。

「そんな……これじゃ部活をつくれません」

「……お前、分かっててやったろ」

「ふふふ、何の事かな」

「あ、そういうのいないから」

「あ、はい、すいません」

「えつと、何の事ですか？」

「ああそうか米田さんは知らなかったね、僕はこう言う賭け事に絶対に負けるんだ」

「えつと、説明になつてないような気がするんですが……」

「理解出来ないのも無理はない、これは我と祐太しか知らない祐太の異能の力なのだからな、必ず運勝負に負ける能力、名付けて『不幸《ダイ・ハード》』だ!!」

「僕はそんなショボイ異能の力なんて知らない。あと僕とジョン・マクレーンと一緒にするな、僕は彼と違ってすぐに死ぬ」

不幸になる異能なんて死んでもいらぬ。……まあ手に入れてるような物だけだ。

「その、つまり堺さんは運が悪いと言う事ですか？」

「うん、まあそうなるね。僕は不幸だ」

「ふふふ、残念ながら貴様達の野望はこれで終わりだな」

「先からふふふを多用してるけどそれしかボキャブラリーないの？」

「うぐっ!!」

「そんな事よりも部活です!!」

「いやそんな事って我、結構シヨックよ？」

「どうしましょう堺さん、これじゃ部活をつくれません」

「いやどうしましょうって言われても」

元をたどれば米田さんが僕の話の聞かなかったからな様な気がするのだけだ。

「ハハハ、仕方が無いなもう一度チャンスをやろう」

「本当ですか!？」

「ああただし条件がある」

「わかりました、私に出来る事なら何でもします」

おいおいコイツにそんな事言つて大丈夫かよ、米田さん将来変な人とかに騙されないか不安だな。

「よかろう、私の条件はお前達が私の仲間になることだ!!」

「仲間?」

「そうだ、我は近いうちに『ヤツら』と決着を付けなくてはいけない。そこで貴様らの力を貸して貰うのだ」

「なるほど、つまりコイツは友達が欲しいんだよ」

「友達ですか?」

「そう、だってコイツも友達いないからね。そんな中で眼帯を着けた米田さんが来たんだ友達になつて欲しいんだらうね」

「断じて違う!!」

「何だよいきなり叫んで」

「我はいつ果てるとも分からぬ身、友達などいらなのだ」

「こんな時まで別にカツコつけなくても良いだろ」

「ともかく、お前との勝負に我が勝ったら仲間になつてもらうぞ」

「はあ……分かったよ。その代わり少し作戦会議したいからちよつと待つてくれる?」

「ふむ、よかろう。では30分後また勝負だ」

「そう、じゃあ僕達は場所を移すよ」

「え、移動してしまうのか?」

「ああ、作戦を聞かれたらまずいからね」

「そうか……」

「米田さん、行くよ」

「は、はい」

屋上から出る時に少し大吾が寂しそうにしてた気がするけど、僕は見なかった事にした。

と言う訳で僕達は今教室で作戦会議をしています。
ちなみに前回と同じ理由で僕達はいま二人つきりだ。

「さて、どうしようか」

「あの塚さん、思い付いたんですけど私がやると言うのはどうですか？」

「まあ確かに僕がやらなきゃいけないとは言われてないからそれも良いけどそれじゃダメだよ」

「どうしてですか？私はそこそこ運はいいですけど」

「米田さんの運が良いとしても、その賭けに僕が関わったら負けるかもしれない。アイツ風に言うとな僕の能力とやらが発動してまた負けるかも知れないからね」

そう、先も言っただとおり僕は相当運が悪いから米田さんの運なんて関係無くなるかもしれない、それ程までに僕の運は悪いのだ

「それに、そんなのが無くてもそもそも米田さんが負けたら意味無いからね。今大事なものは僕の運が悪いとか米田さんの運が良いとかじゃなくてどうやって確実に勝てるかって言う問題だよ」

なんかもうここまで来るとミステリーとか謎解きとかじゃなくて、ただの知恵比べになってるよね。

「コインを弾いたりして結果が分からないオチは出来ないしな」

「どうしましょう、後25分しかありませんよ」

うーんどうしようかな、コインがなに出たか分からなくなれば勝てると思うのだけど……………。

「……………あ、そうすれば良いのか」

「何か思い付いたんですか!？」

「まあね、じゃあ理科室に行こうか」

「……………はい？」

……………
と言う訳で僕達は今、理科室に向かっている。

途中で笹原先生に頼んで内緒で鍵を借りたのは皆には内緒の事だ。

「あの、塚さん」

「なに？」

「野村さんとは一体どうやって出会ったんですか？」

「大吾との出会いが、別に大した事ないよ」

理科室についたので、鍵を使って中に入って僕はある物を探し出した。

「でもそれなりには仲がいいのでしょ？それに野村さんの方は塚さんの事を友達と言ってもおかしくないような関わりかたをしてましたけど」

「まあそんなに気になるなら話すけど」

「本当ですか!？」

「そうだな、あれは……」

あれは、周りの皆がだんだんグループに固まってきた頃、つまり僕がぼっちになった頃だ。

その時は体育の授業をしていた。

「今日はテニスをやってもらうぞ、そうだなーじゃあ」

来る僕達ぼっちにとっては超えられない壁、そして同時に最も残酷な言葉が。

「お前ら好きな奴とペアをくめ」

教師達の心無い一言『好きな奴とくめ』が来てしまったか、まあそれも仕方ないだろう、学校とはいわば社会を簡単に表した物だ、ぼっちになる社会不適合者候補よりは友達との友情を深めさせた方が良いと言う考えだろう。

だが問題無い、今は2クラス合同で行っている。そして奇跡的に偶数になったのだ、つまり僕がぼっちになる事は無いのだ。

きっと何処かで僕と組みたくは無いけど他の友達はもうそいつの友達と組んじゃったから仕方ないか、と言う事を考えてる奴が居るはずだ。

とかなんとか色々考えていた時に大吾とは出会ったんだ。

「あの……」

「なに？」

「我とペアを組んでくれませんか？」

「ああ良いよ」

「……え？それだけですか？」

「うん、だから言ったでしょ？大した事ないって」

「確かに言いましたけど」

「ちなみにその後、僕は普段は運動を余りしないから大した活躍も出
来ずにスタミナ切れ。大吾は太っていてしかも多分目が悪くて余り
見えないからって言ったらなんか差別みたいになるけど運動音痴
だったもんでテニスの試合は全敗したよ」

「それを堂々と言うのもどうかと……」

「さあ準備も出来たし行こうか」

「は、はい」

「これでなんとか勝てる筈だ。」

「来たか」

「ああ、なんとか勝てそうなんでね」

「そうか、では始めよう」

「そうだね、100円玉は僕が出してあげるよ」

正直言つてここで僕の100円玉を使わないと勝てないからどうか
ひかかって欲しい。

演技は自然だと思っただけど、どうだ？

「ふむ、良かろう」

よし、これで勝てる。

「だが忘れてないな、コインを弾いたりしたら反則で私の勝ちだから
な」

「分かってるよ」

「塚さん、頼みましたよ」

「大丈夫だよ、米田さんもあれを見たら安心でしょ」

「まあそうですけど……」

「よし、じゃあ始めよう」

「我は表だ」

「じゃあ僕はそれ以外だね」

そう言うとは僕は10円玉を弾いた、そして落ちて来た10円玉をキャッチした。

そして大吾を見習ってゆっくり手をひろげた。

「こ、これは!?!」

「うん、これは表じゃないね。僕の勝ちだ」

僕の手の中には真つ黒な10円玉があった、表か裏か分からない10円玉が。

「お前、そのコインになにをしたんだ?」

びっくりして中二病喋りがなくなってるな。

「酸化って知ってるよね?」

「酸化?あの理科で習う酸化か?」

「その通り、10円玉を燃やして銅を酸化させたんだ。これで表も裏も分からないよね、だから僕の勝ちだ」

そう、理科室でなにをしようかと言っていると10円玉をアルコールランプで燃やしていたのだ。……ちなみに犯罪行為になるらしいから皆さんはやめてね。

「いや、何をしたかは分かった。だが表も裏も分からないなら貴様の勝ちではないだろ」

「なにを言ってるんだい?」

「なにって、言ったままの事だろう」

「いやいや、僕は『それ以外』って言ったんだよ。表も裏もないならそれ以外だろ?」

「そ、そんなの屁理屈じゃないか」

「でも勝ちも勝ちだ」

「くう………、分かった我の負けだ」

「……悪いとは思ってるよ」

「あのー、じゃあ部活に参加してくれませんか？」

「ああ良からうこの老躯、存分に使い潰せば良からう」

「いや、君は別に年老いてないでしょ」

カツコイイのは何となく分かるけど言葉の意味ぐらい知ってから使おうよ。

まあでも悪い事したよな。確かに反則は僕はしてないけどそんなの言い訳で、人によってはもつと食らいついてくるし、場合によっては部活の話を無かった事にしても僕は何も言えないのにそれを受け入れてくれるなんて。

大吾は以外とイイヤツかも知れない。

たとえ中二病でもコイツはきつと普通に友達が欲しくなるし恋人だって欲しい筈なのだ。

それなのに僕は大吾を騙したと言っても仕方が無いような事をしてしまったのだ、もしかしたらもうコイツともう会話は無いかもしれないな。

僕がそんな事を考えてると米田さんが前に出てきた。

「はい、じゃあこれから野村さんも私達の友達ですね」

「……え？」

「だって野村さんは友達が欲しいのですよね。だったら今日から私達は友達です」

「わ、我は友達などいらんと言ったであろう」

「あ、そうでしたね。じゃあ……仲間です」

「仲間……」

……やっぱり米田さんはアザトイのかもしれない。

「まあ、いいんじゃない。友達がいらなら僕達は部活の仲間って事で」

「そ、そうだな我らは仲間だ」

「はい、それじゃあ私は先生に部員確保の知らせをしますね」

そう言うと米田さんは屋上を出ていった。

「祐太よ、彼女ってどうやったら出来るのだろうか？」

「……は？」

「だから彼女とはどうやったら出来るのだ？」

「……米田さんならやめた方がいいよ」

「ハハハ、安心しろ別にお前から奪ったりはしない」

「じゃあなんでそんな事聞いたんだよ」

「お前達を見てると恋人と言うのはこう言うものなのかと思ったからだ」

「なんで僕達がそう言う感じにみえるんだよ」

「いや、なんとなくな。それにしても奪ったりはしないのところで反応しないんだな」

「は？いや別に深い意味は無いけど」

「なんだ、てつきり惚れてるのかと思ったぞ」

「……おいおい」

「……コイツは一体何を言ってるのだろうか、僕が米田さんを好きな訳はない、ただの知り合いだ。」

それにしても今日は疲れた、だから大吾と関わるのは嫌だったのだ。

それに笹原先生に追加で貸しが出来てしまったのだ、これからの事を考えるとなんと言うか……

「冗談は顔だけにしろよ」

「……不幸だ。」

何処でも誰でも青春が素晴らしいとは限らない

皆さん、部活とはどういう物かわかりますか？

部活とは中学校や高校などでバスケットや野球、サッカーなどの運動、あるいは囲碁や習字、マイナーなのだと言われ一人一首などの文系で学校内の生徒間で絆などを深めたり、その競技の技術を深めたりするものです。

そして部活とは青春の象徴の一種として世間からは捉えられているのか、よく小説や漫画やアニメなどの題材としてあり、その部活の中で登場人物達がどの様に成長するのかと言う姿が見られます。

まあそんな青春の象徴たる部活と言う物に高校二年生になった僕も遂に参加したのですがここで一つ問題が生まれてしまったのです。

「ねえ米田さん」

「なんですか塚さん」

「この部活って何部だったけ」

「『人助け部』ですよ」

「だよね……」

「はい……」

「ちつとも人が来ないね」

「……ですね」

そうなんです、ちつとも助けて欲しい人が来ないんです。

「で、でも誰も助けを求めに来ないと言うのはとても平和でいい事ですよ」

「まあそれはそうなんだけどね……」

前回どうにか詐欺まがいの事をして大吾を部活に参加させて、笹原先生の大吾を見た時のまるでヤバイ奴を見てしまった的な反応を乗り越え無事に『人助け部』を作る事が出来ただけで、いかにせん人が来ない。

まあ米田さんの言う通り、人が来ないと言うのは平和として受ける事も出来るけど、これだと部活を作った意味は無いので出来れば何か

しらの事件が起こって欲しい物だ

「何か面白い事は起きないかなー。なんなら血まみれの人に来てくれたら楽しいのだけど」

「そんな人間きの悪い事を言ったらいけませんよ」

「それより、大吾はどうしたか知ってる?」

「野村さんなら……『すまない、今我はヤツらとの決戦に行かなければ行けないのだ……まってるよ今波動拳を決めてやるからなー!!』と言って何処かに走って行きましたよ」

「……あいつ今度ブチノメス」

部活よりもストリートファイターをやりに行くとか、あいつどうかしてるのか?」

コンコン

「どうぞー」

どうやら遂に待ちに待った依頼人が来てくれたらしい、米田さんが返事をした。

ガラガラ

「えつと、ここが人助けをしてくれる所で良いのか?」

「え? はい、そうですけど……」

中に入って来た人は髪を短く揃えていて、制服ではなくスーツを着ていた。

「あの、高橋先生が何の用ですか?」

「ああ、その笹原先生の紹介できたんだけど」

……これは絶対に面倒臭い依頼だ間違いなく面倒臭い、早く断らなければ。

「あと笹原先生の伝言で『理科室の鍵』って言われたんだけど、なんかあったのか?」

……まさかこのタイミングで仮を返せと言われるとは。

「不幸だ」

「それで、依頼の内容は何でしょうか?」

「その前に、本当にこの部活はどんな願いを叶えてくれるのか？」
「はい!!どんな願いもかなえますよ」

「おいおい、良いのかよ自分ができない事を言われたら気まずくなるでしょうに。」

「実はな、行方不明の生徒を探して欲しいんだ」

「……は？」

「やっぱり無理か？」

「いえ、大丈夫です!!」

「ちよ、米田さん!?!」

「ここにいる堺さんがズバっと解決してくれますよ」

「本当か!!」

「先生が、身乗り出してきた。」

「ちよつとまって下さい、そう言うのは警察とか探偵とかそう言う所に頼ればいいじゃないですか」

「いや、それが警察を操作には出して欲しく無いって親が言ってるんだ。一応担任としてはこう言うのはな……」

「なんで警察に頼まないんですか？」

「親の意見はどうせただの家出だからと言って警察には頼らないって……」

「だからって警察に頼らないのはどうかと……」

「まあ一旦それは置いとくとして、どうして僕が解決するのき、こんな重大なことなんて手に負えないよ」

「でも、堺さんはいつも謎を解いてくれたじゃないですか」

「いやいや、行方不明の人の行方なんてそれこそホームズやコナン君なら解るだろうけど僕なんてそこら辺の一般人だよ?わかるわけないよ」

「そうか……まあそれもそうだよな」

「……はあ分かりましたよ、一応その人の特徴とか名前とか教えて下さい。それに当てはまる人を見つけたら教えてくださいから」

「ああ、そうしてくれると助かる」

「それで、どんな人なんですか？」

「そいつの写真がこれだ」

そう言うが高橋先生が胸元のポケットから写真を取り出した。

その写真には特に特徴が無いがニツコリと言う笑顔と言うよりはヘラヘラと言う方が合ってる男子生徒が写っていた。

「名前は宇佐野 新太・うさの あらた・って言うんだけど、見かけたら教えてくれ」

「分かりました」

「こんな依頼を頼んですまん、じゃあまたな」

そう言うが高橋先生はこちらを振り返らずにかえって行った

.....

「断って良かったのでしようか……」

「あんな依頼、僕達の手には負えないよ」

「でも……」

「まあ写真はあるんだから、それでいいでしょ」

ガラガラ

「今、帰ったぞ!!」

「……少しは空気を読んだらどうだい」

「む、どうしたのだ?」

「実は先程、依頼がありました」

「ほう、どんな依頼だ?」

「行方不明の人を探せだって」

「なんと!!そんな重大な事があったのになぜそんなに余裕なのだ!!」

「依頼を断ったからだよ」

「なに!?なぜ断ったのだ!?!」

「こんな依頼、僕達の手には負えないだろ」

「まあ、それもそうか」

「一応写真を貰いました、これです」

「むむ、これは宇佐野ではないか!!」

「お前、この人の事してるのか!?!」

「知ってるも何も、宇佐野は私の仲間候補だ。今日は最近会わないか

ら様子を見に奴の家に行ったのだ」

……大吾の仲間候補とか、どんなヤバイ奴なんだよ。

……ん？宇佐野の家に行った？

「あれ？お前、今日はストリートファイターをやりに行ったんじゃないのか？」

「なに!?お前どうして帰りにストリートファイターをやりに行ったと分かったのだ？」

「……まあそれは一旦置いて、そいつの家に案内してくれないか？」

まあ謎が解けるとは思わないけど出来る事はやった方が良いでしょう。

「うむ、よからう。付いてくるが良い」

大吾の態度にちよつとイラつくけどまあ気にしないで行こう。

.....

「それで、家に来たわけだけど……」

「見事に追い出されてしまいましたね」

「うむ、実は先程来た時もこのように追い出されたのだ」

「そう言うのは先に言えよ……」

そう、大吾の案内で家に来たのは良いものの親に事情を説明して中を探させてくれと頼むと、

『子供の遊びには付き合わない』

と言われ追い出されたのだ。

「さてどうするか、全部振り出しに戻ったぞ」

「あの……」

「はい？」

振り返ると、僕達の後ろには見た目的に性格がキツそうな子がこちらを睨んでいた。

「家に何か用ですか？」

家に、という事はこの家の人だろう。そしてこちら辺の中学校の制服を来るといふ事は、宇佐野の妹だろう。

「君のお兄さんに用があるんだよ」

「へ!?なんで私に兄がいるってしってるんですか?」
「なんでって、僕達は宇佐君と同じ学校に通ってるからね」
「はあ、そうですか。それで兄に何の用ですか?」
「実は、宇佐野さんが行方不明と聞いて探してるんです」
「そうだ、我と宇佐野は親友と言っても間違いない間柄。しかし宇佐野め、こんなに可愛い妹がいるなんて聞いた事ないぞ!!」
「は、はあそうですか……」

大吾はもう少し空気を讀んだ方がいいと思う。読まないせいでこの子が驚いていいのか喜んで良いのか分からなさそうじゃないか。
「ごめんね、こいつらこう言うヤツらなんだよ」

「そうですか」
「まあと言う訳で、何かお兄さんが何処に行ったか分かるような物は無い?」

「知りません、兄とはあまり関わらないので」
「でもなんか無いの?些細な物でも良いんだ、例えば日記とか」
「……まあその程度なら持ってきてもいいですけど」
「そう、ありがとう」

そう言っただけで妹さんは家の中に入って行った。

.....
「これが日記です」
「ん、ありがとう」

僕は試しに一番上のページをめくってみた。

5月1日 今日が変わらない退屈な日だった
5月4日 今日晴れ異常なし
5月9日 特になし
5月13日 たい焼き食べたい

「……なんだこれ?」

「何かのメッセージですか?」

「いや、奴はそんな洒落た事をするような奴ではない」

「これは日記と呼べるのか？最後に關しては日記じゃなくて感情とかそ言うののだぞ。」

「これが日記なの？」

「ええ多分」

「あの、これ以外何かないですか」

「いえ、これ以外は。すいません兄はこう言う人なんです」

正直こんなじゃ宇佐野が何処に行ったかなんてわからないぞ。

「あの、これは内緒なんですけど」

「なに？」

「実は、兄が居なくなった日に部屋に首吊りで使ったような縄があったんです」

「なんだと!!」

大吾の声がちよつとうるさくて、耳にキーンと来てしまった。

「じゃ、じゃあ宇佐野さんは自殺を……」

「それはないよ」

「うむ、ないな」

「え、なんでですか!？」

「だって、自殺したなら死体がある筈だろ」

「あ、なるほど」

「ならば、自殺サイトの仲間と会いに行ったとかはどうだ？一昔前は集団自殺なんかが流行ったろ？」

なるほど、日々ネットに入り浸ってるだろう大吾らしい意見だ、だけれど……。

「無いな、集団自殺に行ったならわざわざわざ行った日に自殺の縄でわざわざ輪っ子を作らないでしょ」

「……なんで輪があったってわかるんですか？」

「ん？だって使われた様なって言ったら？」

「……まあ確かに」

「つまり、今の所自殺うんぬんは分からないね」

けれど、この縄は何か關連してるかも知れないな。

「親がどうしても僕達を追い返すのも気になるし。」

「ねえ君、えつと……」

「宇佐野 美月・うさの みづき・です」

「美月さんから見てお兄さんってどんな人？」

「……あなたに似ています」

「……僕に？」

「はい、喋り方とか見た目とかは似てないんですけどなんか……雰囲気？とかが」

「そう、ありがとうねまた今度呼ぶかもしれないから」

「はい……」

「これといった収穫は無しか、さてどうしようかな。」

「それで、何か分かったのか？」

「いや、これと言って何にも」

「そんなあ、じゃあ宇佐野さんは何処に？」

「まあまだ情報が足りないから、それから考えよう」

「で、なんで俺の所に来たんだ？」

「いやー笹原先生ならなんか知ってるんじゃないかって」

「何も知らん」

「と言う訳であの宇佐野って人の情報を掴みに笹原先生に聞きに来ました堺です。ちなみに大吾や米田さんはいない。」

「いや、ほら笹原先生ってなんか生徒の弱味とか握ってそうなんで。それに先生って生徒指導でしょ？なら厄介者ならお世話になってるかなって」

「お前、俺をなんだと思ってるんだ」

「世界一の紳士」

「よし、話してやろう」

「話してくれるのかよ。」

「まあとにかく変わった奴だったな。なんかやけにカツコつけた喋り方をしてるんだ。弁当はいつもたい焼きだけを観光スポットなんか載ってる雑誌を見ながら食べてるし、真夏だってなのに何時も冬服のままであいつの学ラン姿じゃない姿を見たことないな」

「はあ……」

「どんだけたい焼きが好きなんだよ。」

「後、家族はあいつと妹と両親以外は事故死したみたいだな。それにあいつの親父の会社は一回倒産して相当生活が苦しいみたいだな」

「……一体何処からそんな情報を？」

「まあそこは大人の事情ってやつよ」

「それに多分、いや絶対にあいつは虐められてたんだよ」

「虐め？」

「これは有力な情報なのは？」

「ああ、だけどあいつは財布を取られようと誰かに殴られようと陰口を言われようと『どうでもいい』って言ってヘラヘラ笑っててな、途中からは虐めてた奴らは気味悪がって殴ったりはしなくなつたな」

「そうですか」

「それに、最近は特に様子がおかしかったな。なんか何処かに行つたようだ。」

「なるほど」

「虐められてるのに『どうでもいい』とか、しかもそれでヘラヘラ笑ってるなんて確かに気味悪いな。」

「それに美月さん、そんな人と僕が似てるってどういう事だよ。」

「ありがとうございます」

.....

「それで、何か有力な情報はあつたか？」

「うーん、まあ確かに有力っちゃ有力だけど真相にはたどり着けそうにない」

「今の情報だけだと自殺の線を強めるだけだからな、自殺は先に無いつて言ってしまうからな。」

「宇佐野さん、何処に行ったんでしよう……」

よし、まあ無理だとは思うけどコナン君やホームズよろしく考えて見ますか。

「この難解事件、名付けて『オールフィクション・消えた死体事件・』をどう解決する祐太よ」

……少しやる気が削がれたような気がした。

幽霊と幸せと言う物は似ている

皆さんにとって幸せとは何でしょうか？

それは人によって違って、例えば恋人と過ごす日々が幸せとか、友達との何気ない日常とか、勉強や仕事を終えた後の自分へのご褒美とか、色々あると思います。

そして僕にとっての幸せとは不幸でないことなのです。

本来は幸せでない事を不幸と言う物だと思うのですが、僕は生まれてから不思議な程に不幸に巻き込まれて来たので幸せの感覚がよく分かりません。

では僕にとつての不幸とは何か、それは巻き込まれる事です。

散々僕が不幸だと言っているのは見た事でしょうが、例えば、米田さんが部活に僕を巻き込んだんで掃除当番をやらされたり、大吾との勝負の為に笹原先生に貸しを作ったり、この様な事が僕にとつての不幸なのです。

しかし不幸とはいつ何処でも襲いかかって来るもの、ならばその襲いかかって来たものからは早く逃げなければなりません。

と言う訳で今回のこの『消えた死体事件』とやらも早めに解決しなければいけないのですが……。

「まったくもってわからない」

「まったく、我が相棒がこんな状態とは情けない……」

「でも、野村さんも分かってませんよね？」

「いや、我はあれだ……近接戦闘型なのだ。この様な事件は頭脳派の祐太に任せてるのだ」

「僕は別に頭脳派じゃない、ただ動く事と考える事を比べると考える事の方が好きなだけだ。後僕は君の相棒じゃない」

「そんな事は置いといて堺さんは早く謎を解いてください」

いや、解けと言われてもな……やっぱり普通に考えてこれって警察の仕事じゃないの？

僕がどう足掻いても名探偵コナン君には到底及ばないし、なんなら毛利小五郎にも及ばないのだ。

「やっぱり僕達にはこの依頼は重すぎたんだよ、素直に警察に任せよう」

「だが折角宇佐野の家に行ったのだ、可愛い妹も見れたしもう少し頑張って考えてみようじゃないか」

「そうですね、もう一回状況を整理してみましよう」

「状況を整理ね……」

状況を整理しても対して変化は無いと思うけどな。

それによく漫画なんかで見る『そうか、そう言う事だったのか!!』つて言ういわゆるヒラメキと言うやつは運が絡んでくる、主人公はそう言う運が元から備わってるからいいけど、僕はな……。

「まあでも、やれるだけやってみるか」

.....

「まず、今回の事件は宇佐野の行方がわからないから探すと言う内容だ」

「はい、そうですね」

「具体的にいつ居なくなったかは先生からは聞いて無いけど、一ヶ月や二ヶ月ではなく二ユースなんかになってないから大体一週間か二週間とかそんなぐらいに居なくなったのだろう」

「そうだな、我と宇佐野が会わなくなったのもそのぐらいだ」

「……そう言えばお前は宇佐野と仲が良かったんだな、どんな話をしたりしてたんだ？」

「そうだ、なんで今まで大吾に聞かなかったのだろう。」

宇佐野と一番一緒居たのは大吾だ、一番有力な情報を持っているはずだ。

「宇佐野との会話か……最近のゲームやラノベの評価や甘い物は好きかとか、後はエロは世界を救うとかだな」

「……最後のに関しては絶対に触れないようにしよう。」

「最近で変わった事は無かったか？」

「うーむ、これと言って無いな。強いて言うなら宇佐野は最近やけに忙しそうだったくらいだ」

「忙しそうって、具体的には」

「バイトを初めたのだ」

「バイトか……」

ダメだな、やっぱりその程度だったら何処に行ったかなんて何処かに金を貯めて何処かに遠出したぐらいしか思い付かない。

「他には？」

「他は特にないな。」

「そう……。まあいいやとりあえず整理を続けよう。どうやら宇佐野は虐めにあっていたようだな」

「え、虐めですか!? 宇佐野さんは大丈夫なんですか？」

「ああ、何でも宇佐野を虐めたら反応が気味悪くてすぐに無くなったらしい」

「そうですか、良かった。野村さんはその事を知ってましたか？」

「ああ、まあ一応は……な」

「知ってて止めなかったんですか!! どうして助けなかったんですか!!」

「米田さん、落ち着きなよ」

「でも……」

「大吾だって思う所はあるよ」

「じゃあなおさら……」

「すまん、我だって止めたかった。けど我では止めれないのだ、あいつらは止めれないのだ」

「そんな……」

大吾もきつと色々思つてて止めなかったのだろう、大吾は僕と米田さんを省けばその宇佐野しか友達がいなかったのだろう。

そんなぼっちがいきなり虐めをしてる奴らに対して止めろと言うものなら、標的は大吾に変わるかもしれない。

それに大吾に標的が行かなくても水を差されたせいで、もっと虐めがヒートアップするかもしれない。

それなら何もしないでいつも通り側にいてやった方が良かったのだろう。

それは間違っていないし、むしろ正しい。

「まあでも、とりあえずは本題に戻ろう」

「……ええそうですね。すいません野原さん、野村さんの気持ちも考えずに」

「いや、いいのだ。我も実際に止めなかったしな」

「よし、じゃあ話を戻すよ。そして宇佐野の家に行くと家族は門前払い、妹さんはノートをくれたけど中身はまったくもって役に立たない」

一応あの後のページを調べても何も書いて無かった。

あの程度の内容を数日間で飽きるとは、やはり宇佐野は変わり者らしい。

「そして妹さんによると自殺に使ったような縄が部屋にあったと。そして笹原先生の話によればとにかく変わり者で昼休みの弁当はたい焼きのみを観光の雑誌を読みながら食べてたとかなんとか……」

「……やっぱりこれだけじゃ何もわかりませんね」

「……やっぱり僕達には重いよね」

仲が良かった大吾には悪いけど今回の依頼は本当に重いのだ、そろそろ諦めてもいい頃だろう。

そんな期待を込めて大吾のいる方を見ると、俯いた顔で落ち込んでいて自分の顔をさらに酷い顔に変えていた。

「……まあそういう事もあるだろう」

「大吾……」

「それに宇佐野の事だ、その内ひよっこり帰って来るかもしれないな。そうだ折角部屋があるのだ、このポットでお湯を沸かして茶でも飲もうじゃないか」

……きつと大吾はこんな結果に納得してないだろう。

あたりまえだ、友達が行方不明なのだから。

これがあたりまえなのだ、僕みたいにすぐに諦めれるのは宇佐野と大して思い出がないからだろう。

それでも僕の、一応は仲間にしてもらってる友人に、こんな悲しそうな酷い顔をされたら僕も情が働くとやうものだ。

「そうだ僕がおかしいのだ、例え他人でも行方不明になったら心配する物なのだ。」

「それなのに僕はそれをすぐに諦めようとしてる。」

「……クソ、こうなったら絶対に見つけてやる。」

「僕もここまで来て謎が解けないのは腹立たしいし、米田さんが宇佐野の件で落ち込むのは見たくないし大吾にこんな酷い顔をされるくらいなら謎を解かなくては。」

「と、いき込んで言っても何もわからないんだよな……。」

「野村さん、何をしてるんですか？」

「む？ビーカーで水の量を計ってるのだぞ？」

「わざわざそんな事しなくてもそのポットにメモリが書いてますよ？」

「やや!? 本当だな。いやー失敗失敗」

「おいおい、いくら何でもそれぐらい気づけよ。」

「ていうかなんでビーカーなんて持ち歩いてるんだよ。」

「それにメモリが見えない位置にいてももう少し見る所を変えれば……。」

「ん？見る所を変える？」

「あ!!」

「ん？どうしたのだ祐太よ」

「ひよつとして塚さん、宇佐野さんの居場所が分かったんですか？」

「いや、わからない」

「じゃあどうしたんですか？」

「……どうしよう、話してしまおうか。」

「米田さん、大吾この話を誰にも喋らないって約束するか？」

「はい、喋るなど言われれば喋りません」

「我也右に同じ」

「分かった、絶対に話すなよ。実は……。」

翌日、僕はこの前あった宇佐野 美月を宇佐野家の近くにあった公

園に呼び出した。

とは言っても別に火曜日サスペンスにならって犯人の謝罪会がある訳では無い。

美月さんに最後の確認にきたのだ。

「それで、何の用ですか？」

「まあ、君のお兄さんがいる場所が分かったから報告にね」

「え!!本当ですか!？」

「うん、まあね」

「そうなんですか……」

「で、それを言う前に君に確認をしようと思っただけ」

「……確認って、場所が分かったんじゃないですか？」

「いや、君に確認をしたら確率が100%になるんだよ」

「はあ、そうですか……それで、何を聞きたいんですか？」

「君のお兄さんって何処に居るの？」

「……は？」

「いや、君ならお兄さんのいる場所を知ってると思っただけ」

「……今更なにを、私は何も知りません」

「本当に？」

「……何が言いたいんですか？」

「いやごめん君を攻めてるつもりは無いんだよ。これはただの確認だからね、知らないなら知らないで良い」

「そうですか」

「うん、いきなり呼び足してごめんね。流石に気を悪くさせてしまったかな？」

「いいえ、別に大丈夫です」

「そう……じゃあ僕は帰るね」

僕は美月さんに後ろ姿を見せて帰り道に足を進めた。

「ああそうそう、最後に一言……」

そして公園から出る前で少し立ち止まり、後ろを振り返って「最初から少し勇気があれば良かったのにね」

と、満面の笑みで言った。

その時美月さんが少しこちらを睨んでいたような気がするのは、恐らく勘違いじゃない。

前日、僕は二人に今回の事件の結末を話してた。

米田さんも大吾も誰にも話さないと云っているから大丈夫だろう

「先に言っておくと宇佐野はもう死んでいる可能性が高い」

「そんな……」

「おい祐太よ、貴様首吊りの縄の時には宇佐野が死んでいないと言っていたじゃないか」

「ああ確かに、けど居なくなつた先で死んでいたとしたら？」

「……まあ確かにありえなくは無いな」

「……まあ実際に死んだかどうかは本人に会わないと分からない、もしかしたら生きてるかもしれない。元氣を出せとは言えないけど余り深く考えるな、米田さんもね」

「……はい、わかりました」

「よし、じゃあ続きを話すよ」

「ああ、頼むぞ」

「なんで僕がそう考えたかというと、笹原先生の話がもともになつた」

「笹原先生の？どんな話ですか？」

「何でも笹原先生が言うには宇佐野は夏でも学ランを来ていて学ラン姿じゃない瞬間を見た事がないと言っていたんだ」

「それがどうつながるのだ？」

「まあ話を聞け。僕は最初変わった奴なんだなく程度しか思わなかつたけど、いくら何でも真夏に学ランなんて来てたら熱中症になるし、暑くて拷問みたいになつたら倒れてしまう。本人もいくら何でもそんな間抜けな倒れかたはしたくないだろ」

「それは確かにそうですね。温度を感じないと言うなら別でしょうけど、そんな人はまず居ないはずですよ」

「でしよ？そして考えて見て欲しいんだけど、どんな時に真夏でも長袖で熱の吸収の良い学ランなんかきる？」

「日焼けをしないためですか？」

「キャラ設定のため」

「大吾は無視するけど」

「おいまたれよ!!」

「米田さんはいい線行ってるね。まあ学校生活で日焼けなんて部活をして無きやほとんど無いだろうけど。でももし、もう日焼けをしていてその日焼けがかなり変な模様だったらどうする?」

「それは隠しますよ、そんな模様なら見られたくありませんし」

「そうだよ。じゃあそれと同じように、それがとても深くて大きい傷跡だったらどうする」

「それは同じように隠します。」

「うん、その通り。まあ簡単に言えば宇佐野は自分の腕に付いた傷を隠すために学ランなんてきてるんだ」

「どうして腕に傷があるって分かったんですか？」

「実は先の笹原先生の話の時に他にも話を聞いていたんだ。何でも宇佐野の家族は妹と両親以外は交通事故で死んでいたらしい、そしてさらに父親の会社は倒産したんだ。会社は倒産して生活に困っているも助けてくれる親戚はいない。」

「生活が苦しい中で両親は子供を養わなければいけない、きつと共働きもしただろうね、それは相当なストレスになった筈だ。そしてそのストレスのはけ口は何処か、子供の頃の宇佐野に矛先が向いたんだらうね。よくある話、家庭内暴力って奴があったと考えたんだ」

「ついでに言うなら弁当でたい焼きしか食べなかつたのは親からまともな弁当や小遣いを貰ってないからかもって考えもある」

まあただ単にたい焼きが好きなだけだと思うけど。

「それでここからは正直推理って言うより妄想とか想像とかそういう物なんだけど」

「と言うとどう言う事だ?」

「そのまんま、これから先は自信が無いってこと」

「どうしてですか?」

「話を聞いたりした限りでは確信は持てなかつたんだ」

「ほう、それでどのような事があつたと考えるのだ？」

「あの妹さん、美月さんは恐らく宇佐野の行った場所が分かっている」「え、じゃあなんで行方不明なんて嘘をついたんですか？」

「美月さんは宇佐野の兄妹だ。自分の兄が親から虐待を受けていたのは知っている筈だろう。でも助ける事は出来なかつた、もしも助けたら今度は自分が標的になるかもしれないからね」

「そしてある日に兄が自殺をしようとしてるのを何かのタイミングで知つたんだろうね、例えば自殺の現場に鉢合わせたとか。そして流石に自殺は止めなきやいけないと思つた美月は宇佐野に家出をする事を勧めたんだ。だから宇佐野は家出の資金を稼ぐ為にバイトを初めて、昼休みの時は観光の雑誌なんか見てたんだと思う」

「でもそれじゃあ美月さんが宇佐野さんが行方不明なんて嘘をつく理由がありませんよ」

「いや、もしも親に宇佐野が何処に行ったかを伝えたら連れ戻されてまた宇佐野が虐待を受けるかもしれない。もしも家出が近所の人に広がつてそのせいで虐待がバレたりしたらいけないから、そうさせない様に躑をするでしょ。多分僕達を追い返したのも同じような理由だね。それにもしも兄を自分が逃がした事を喋られたら今度は自分が標的になるかもしれないからね」

「では、なんで自殺に使つたような縄があつたなんて言つたのでしょ？？」

「多分、捜査を攪乱させる為にとっさについた嘘だね。まあ自殺に縄を使おうとしてたかとかは本当かどうか分からないけど」

「じゃあ既に死んでいると言うのはどうしてなのだ？家出が理由で行方不明になつたならその先に親は居ないのだから死ぬ必要も無かるう」

「普通に考えて、たかが高校生が住所を持つたり仕事をして生活をするのは無理だろ？それに働くにしても自分が家出少年だとバレればまた親の元に帰らなくてはいけないからね。もつと言えば家出をしてそこに住むなら普通は観光雑誌なんかじゃなくて住むホテルの住所なんかを見てるべきだろう？宇佐野にとってはこの家出は死ぬ前

の最後の旅行の様な感覚だと思ったからだよ」

この考えは宇佐野が何処に行ったかではなく、宇佐野は今までどんな所に居たのかを考えた正に『見る所を変えて』思い付いた考えだ。今度気が向いたら大吾にお礼でも言おう。

「じゃあ宇佐野さんはもう帰って来ないのでしょいか……」

「……わからない」

「え？」

「もしかしたら宇佐野が家出をしてから心変わりして家に帰って来るかもしれない。」

「じゃあ宇佐野さんは家族を心から嫌っていた訳ではないんですか？」

「さあね、帰って来たらそうかもね。でもそれを決めるのは宇佐野自信だから」

そう言ったら米田さんは少し残念そうにしていたが、それと同時に何か希望を持ったような表情をしていた。

美月さんとのやり取りを終えた帰り道、宇佐野は今何をしてるのだろうか？と、そんな考えが頭をよぎった。

自分の中ではもう自殺をしてるだろうと考えつつも、やはり人が死んでいるかもしれないのは例え赤の他人だとしても気分が良いものではないらしい。

あの後には普通に解散になった。

米田さんは少し疲れたような落ち込んだような表情を見せた後僕達と別れた。

大吾はやはりショックだったのか凄く落ち込んでいたがそれでも無理矢理いつもの中二病スタイルを貫いて最後には大声で笑って帰っていった。……心做しかその笑い声に張りが無かった気がする。

もし宇佐野が自殺をしていたとしたら宇佐野の人生はそこで終了だ、これから先幸せになる事は無い。

だとしたら宇佐野はとても不幸と言うことになる。

ならまだ生きていた方が幸せなのだろうか？答えは否である。

生きていればいつか幸せなれるなんて有り得ない、生きていれば絶対に不幸が訪れるのだ。

人生楽ありや苦もあるさなんて言っているが大人になって社会に出れば九割方苦しかない。

宇佐野はきつと若くしてそれを知ったんだろう、だから人生に見切りをつけたのだ。

誰しもが幸せな青春時代や人生を歩んでいるとは限らない、いつも誰か不幸になってるし何か悩みを持っている。

少なくとも青春は素晴らしいと言う考えは、僕が居れば否定される。

当たり前の事だ、歩行の邪魔をするカップルも一人で帰り道を歩いているぼっちさんも今日の前を通ろうとしているヤケにヘラヘラ笑っている人もきつと何か不幸を持つてるのだろう。

そう結論付けると、ヘラヘラ笑っている人とすれ違った時……

『僕の妹がお世話になったね』

……と声が聞こえた気がした。

「え？」

振り返ると曲がり角を曲ったのか姿はもう見えなくなっていた。

「……………まさかね」

宇佐野はまだ生きているのかももう死んでいるのか僕は知らないし、生きていたとして家族を許して帰って来たのか、家族に復讐でもしにきたのかも分からない。

まさかとは思うがすれ違ったのが宇佐野の幽霊か本人かなんて知る由もない。

ただ心の奥底から幽霊でない事を祈っていたのをとても良く覚えている。

女子は思わなぬ所で浮気をうたがってる

青春は勉強と部活と恋で出来ていると言うのをどこかで聞いたことがある。

しかし本当にそんなもので青春と言えるものが出来ているのだろうか。

部活は入れればある程度満たされるだろう、勉強も得意不得意はあるだろうが頑張れば個人的な充実はあるだろう。

しかし恋はどうだろうか。

そりやあ顔の整っている、いわゆるイケメンや美少女と言う顔立ちに生まれていれば恋も充実するだろうが残念ながらも不細工に生まれてしまった人達はどうなんだろうか。

女子という者はテレビや雑誌でイケメンを見てはキャーキャー言っているし、男子はアイドルやアニメの美少女を見れば可愛いと言うのである。

もし彼氏や彼女がそこまで顔立ちがよく無ければそれはその人が男子、あるいは女子から男性や女性に成長しているからだろう。

まあ男性がどうかか女性がどうかかは一旦置いてといてもとにかく必ず不細工が恋の面が充実しないと云えないとしても不利になるのは仕方ないことなのだ。

まあかく言う僕も別にイケメンとまでは行かなくても普通の顔、いわゆるフツメンかもしれないが不細工なので恋の面は充実してないのである。

しかし僕はそのせいで青春を遅れて無いとは思わない、だって勉強はまあまあ出来るし、部活だって最近始めたとは言え活動にはげんでいる。

そんな生活に対して不満も抱かないし、むしろ充実感を感じているのだ。

それなのに僕は青春を遅れてないと言うのはおかしいではないか。

「そうは思わない？米田さん」

「はあ、そうは思いますがいきなりどうしたんですか？」

「笹原先生に無理難題を言われたんだよ」

「どんな事を言われたんですか？」

「僕に恋人の一人でも作れって言うんだ。まったくあの人は僕の親かよ」

なんで先生がいきなりラブコメの話を生徒に振ってきてそれに対して反論したら「お前も一回は恋愛をしてみろ!!ちようど可愛い後輩もいるんだし」とか言いやがるんだ。

「別に無理難題とまでは行かないと思いますけど」

「いや、無理でしょ」

「なんでですか？」

「恋愛って大体は友達から始まつたりするものでしょ？僕はぼっちだから無理」

それに、イケメンならまだ希望もあるがイケメンでも無い僕がモテる訳も無いのである。

「堺さんはぼっちじゃありません!!」

「いや、ぼっちだって。僕はクラスでも誰も話し掛けて来ないし……」

「私がいるじゃないですか!!」

「……え？」

私がいるじゃないですか？米田さんがいるから他の人なんて居なくても良いってことか？

その言い方はまるで……。

いやいや、そんな都合よく解釈なんてしたら後で後悔するだけに決まってる。

きつと米田さん特有の『無意識あざとい』に決まってる筈だ。

「堺さんは頭も良いしなんだかんだ言って優しいし、それに友達思いだし、それに……」

「……それに？」

おいおい何を期待してるんだよ僕は。

でも米田さんは真剣な顔をしてるし、いつもなら直ぐに空気の読めない様な発現をする筈なのに。

「それに……」

やばい、凄いドキドキしてる。なんだろうこの気持ち？

ひよっとして米田さんって僕の事を……いや無いな絶対にある筈が無い。

ついこの前まで一度も会った事が無かったんだもの僕を好きになる筈が無いじゃないか。

じゃあなんで僕はこんなにドキドキしてるんだろう？

もしかして僕は米田さんの事が……

「それに野村さんもいます」

「……へ、大吾？」

「はい。だから堺さんはぼっちじゃありません」

「はあ、だよー」

「どうかしました？」

「いや、その友達と一緒に部活もしないでどこをほつつき歩いているのかなって思ってたね」

まあそんな訳ないよね。

トントン

僕がちよつと残念な気持ちになつていてその気持ちを吹っ飛ばす様にノックがなった。

「どうぞー」

米田さんがさっきの流れを全く感じさせないノンビリした声で返事をした、今回はまともな依頼であります様に。

「失礼します。えつとここが願いを叶えてくれる所かな？」

そう言いながら中に入ってきたのは、短く髪を揃えていて頭の方に団子みたいな形で髪を結んでる多分少し化粧をしてると思われる今の女子が入ってきたの。

「いえ、願いを叶えると言うよりは手伝いをするところです」

米田さんはそう言うけど殆ど同じじゃないだろうか？

「そうなんだ。えーと名前を聞いてもいいかな？私は三年の前原 望

・まえばら のぞみ・宜しくね」

どうやら先輩だった様だ、それにコミュニケーション能力も高いと

思われる。

「私は一年A組の米田晴香です。よろしくお願ひします望先輩」

「二年B組の堺です」

「えーと、部長は堺君かな?」

「いえ、私です」

「あ、そんなんだ。なんかごめんね」

「いえ大丈夫です」

まあ仕方ない事だ、普通は学年が上の方が部長だと思うだろう。

「それで、依頼は何でしょうか?」

「ああその事ね。実はその……」

望先輩はそう言うともじもじしている、何か言い難い事でもあるのだろうか。

「何か言い難い事ですか?」

「それがえっと……彼氏の浮気調査をして欲しいの」

浮気調査……か、確かにそれは言い難い事だろう。

何せ自分の好きな相手を疑っている事を他人に言う訳だ、とても気まずいに違いない。

「残念ですがお断りします」

「堺さん!?何を言ってるんですか!!」

「いや、普通に考えて浮気調査なんて出来ないでしょ。僕達は探偵じゃないんだよ」

「探偵らしき事ならしてるじゃないですか」

「らしきって何だよらしきって」

「いつもみたいにババッと推理して下さい」

「推理って調査なんだから尾行とかでしょ」

「堺さんはもう少し人の気持ちを考えて方がいいです」

「何を言ってるんだ、僕は常に人の気持ちをかんがえてる。これ以上に嫌われないように」

「大体堺さんはいつも……」

「あの……」

「ああすいません、僕達はいつもこんな感じなので気にしないでくだ

「やっ」

「堺さん!!」

「ははは、仲がいいんだね」

「……この人は笑顔で何をいつているんだ？」

僕はただ米田さんに巻き込まれているだけだ、そもそも同級生と上手く交友関係を築けないのだ先輩後輩の関係を上手く築けるはずない。

「ただ巻き込まれてるだけです」

「私は巻き込んでません」

「ふふふ、いや君達は仲良しだよ」

「そんな事よりも依頼です。受けますよ」

「だから米田さん」

「堺さん、堺さんは小説をかいてるんですよね？」

「え? まあ書いてるけど」

「じゃあいい機会です」

「……なにが？」

「浮気をしてる人がどんな挙動でどんな行動をするのかを取材出来ますよ」

「この子はもつと人の気持ちを考えて方がいい気がする。」

「あのね、米田さんの気持ちはわかったし言いたい事もわかった。けどさ浮気してる事を前提にした話を目の前でするのはやめようか」

「あ!! すいません!!」

「ああ全然気にしないで私もそう思ってるんだし」

「分かりました気にしません」

おい、そう言うことは言うなよ。

「なので依頼を話して下さい」

「え、いいの？」

なんで僕に視線を向けるんだよ、照れちゃうだろ。

まあ米田さんの気持ちをわかったとか言っちゃったこんな話を聞いただけなら良いだろう。

「まあ聞くだけなら」

「浮気をしてるかもって思いだしたのは半年前なの。その頃からあんまり会ってくれなくなってるかも言ってくれないの、聞いてもみたんだけど曖昧に誤魔化されちゃって」
「なるほど……」

米田さんは望先輩の話に聞き入っている。
やはり同じ女子どうしそういう話に何か共感できる部分があるのだろうか。

「携帯はずっと裏返しでLINEにもパスワードをしてるみたいで……」

「それは怪しいですね」

……それって怪しいか？

「あのLINEにパスワードをしてたら怪しいんですか？」

「何をいつてるんですか堺さん、パスワードなんて浮気相手のメッセージを隠すためですよ」

「……そんなもんか」

「後はたまに私の家に来た時も靴が揃ってたり」

「なるほど……」

いやいやそれは全然おかしくないでしょ!!

「それでその人はどんな人何ですか」

「この写真がそうよ」

そう言うと望先輩はスマホの写真を見せてきた。

そこには笑顔が良く似合う茶髪のイケメンが写っていた。

「なるほどこの人を尾行すればいいんですね」

おい、なんで調査する前提なんだよ。

「この人の住所はどこですか？」

米田さん、結構やる気になっちゃってんじゃん。

結局この後は相手の住所を聞いて、明日は休日なので朝の七時から張り込みと言う形になった。……ちなみに男の名前は真鍋 宗也・まなべ しゅうや・と言うらしい。

.....
という理由で帰り道。

「それじゃあ明日七時に待ち合わせですね」

「そうだね」

「そう言えば堺さんってどんな私服をきてるんですか？」

「私服？ジーンズにパーカーだけ。なんで？」

「ああそれは明日は休日なのでお互いに私服なので気になっただけです」

「なん……だと……」

「堺さん？」

「いや何でもないよ」

「はあ……」

休日と一緒に会うか……今考えればこれはデートと言う奴なのでは？そして米田さんの私服姿を見られるのか。

今まで巻き込まれて来たが米田さんは普通に可愛いのだ……眼帯付けてるけどこの際はどうでもいい。

米田さんの私服か……明日が楽しみじゃねえか。

そんな期待を胸に秘めてると少し笑顔が出てしまったのか米田さんに少し引かれたような顔をされたが、僕は米田さんと下校するのだった。